

生と死をケアすること
— ケアの現象学的人間学から —

浜 渦 辰 二

私は、他者からケアされて生まれてきた(らしい)。やがて、私は、他者からケアされながら死んでいく(だろう)。この、いのちの始まりと終わりという、ケアされる受動性の二つの場面のあいだで、私は、他者からケアされながらも、自分で自分をケアするとともに、他者をケアする能動性をもつことも可能となる。しかし、いま「他者」と漠然と述べたが、ケアという場面では、具体的な人間関係を抜きにして、抽象的な自他の関係としてのみ論ずることはできない。誰がいつどこで誰をどうケアするのかとまで言わなくとも、少なくとも、親密で身近な顔の見える他者としての「あなた」をケアし、そのような「あなた」からケアされることと、疎遠な離れた顔の見えない他者としての「誰か」をケアし、そのような「誰か」からケアされることとは、区別して論じざるをえないように思われる。前者を一人称としての私が二人称としての他者ともつ関係と呼ぶなら、後者は同じ私が三人称としての他者ともつ関係と呼ぶことができよう。「生と死をケアすること」を、ここでは、このような人称的パースペクティブの違いから、現象学的に考察することを試みたい。